

家庭学習応援だより

全国学力テスト特別号

先日、小学6年生と中学3年生を対象にした全国学力学習状況調査(以下、全国学力テスト)が実施されました。全国の小学6年、中学3年の約208万人が受験し、本校も6年生が受験しました。今年度は、4年ぶりに「理科」のテストが行われたことが話題となり、ニュースに取り上げられていました。

今号は、受験した6学年児童全員の解答用紙(コピー)を採点して見てきたことを中心に、これからの家庭学習で心掛けたいことを保護者の皆様と考えてみたいと思います。結果の個票はいずれ配付されますが、解答用紙のコピーは分析のために採点したものであるため、返却はしませんのでご了承ください。

低学年や中学年のお子様を持つご家庭にとっては、まだまだ全国学力テストへの関心は薄いかと思います。ですが、数年後に身につけたい学力を示しながら述べていきますので、家庭での学習にお役立てください。



出題傾向と本校の6年児童の結果

国語

- グループでの話し合いや「6年生になったの抱負」など、**学校生活における日常の場面からの出題**が目立ちました。これまでと同様、作文の設問には、複数の条件が設定されており、本校児童はすべての条件を満たした**正答が非常に少ない**傾向でした。
- 物語文の課題では、「わたし(森田さん)」になったつもりで、問題部の前述をヒントに物語の主題をとらえる解答ができず、解答者である**児童本人の意見を記述してしまう誤答**が目立ちました。
- 作文で印象に残ったのは、**理由を記述することを求められていないのに、なぜか理由を記述しようとする文章が多かった**ことです。2文目に「なぜなら、～からです。」と述べようとしていることです。当然、誤答なのですが、学校の学習指導の中で解消できるようにしていきます。

算数

- 今年度の出題傾向として印象的なのが、「**プログラミング**」の設問が登場したことです。正方形を描くためのプログラムを例示したうえで、**正三角形を描くための誤ったプログラムを正しくプログラムし直す設問**でした。また、正方形のプログラムをもとに、長方形やひし形を描くためのプログラムについても考えさせる問題が出されました。
- 5年生で学習した**多角形の単元から作図の出題**でした。しかし、**多くの児童が正答できませんでした**。正三角形をプログラミングで描こうとする場合、直進方向に120度、角度を変える必要がありますが、正三角形の角は60度と学習したため、誤答したと思われます。実際に授業でプログラミング等で多角形の作図の仕方を学習した旧小学校の児童にとっては、有利な設問だったのではないのでしょうか。
- 割合の設問**は、小学算数の鬼門とも言える単元ですが、案の定**正答率が低かった**です。

理科

- 学校から支給されている**タブレット端末**が登場し、ナナホシテントウの飼育観察記録の設問に採用されました。どの学級でも日常的に使用することになっているので、教科のノート以外にも端末のアプリケーションなどの学習記録をご家庭で確認してみたいと思います。
- 採点してみて、今後の課題となる設問はいくつかありましたが、それ以上に印象深かったのは、**学力の格差**です。理科に関しては、中間層がほとんどいません。「できる、できない」がはっきりしています。**正答率の高い児童は、どの分野の正答率も高い**のに対し、**正答率の低い児童は、どの分野もまんべんなくできていません**。点数にすると100点満点中20点以下になってしまうと思われます。1年後、中学校へ進学すると理科は分野ごとに学習していきます。「生物、地学」「物理、化学」の4分野のどれか1つでもよいので、得意な分野を作れるとよいです。



「質問紙」によるアンケートでは、コロナ禍の影響や一斉休校、自宅での学習支援などの調査が行われました。

近畿大学の丸岡俊之教授(教育行政学)は「**子どもが家庭で過ごす時間が多くなると、家庭状況により、学習内容の理解度や到達度に差が生じる**」と強調しています。「親が子どもの学習や行動に関心を持っているというメッセージが伝わっていることが大切。」としたうえで、短い時間でも「今日はどんな事を学んだのか」など**子供から学習状況を“聞く”ことが重要だと指摘しています**。

家庭ではどのようなサポートをすればよいですか？

国語

- ・国語に関しては、家庭で文章を書かせるような学習は取り組みにくいと思います。そのため学校での学習で、児童の苦手とする複数の条件で文章を書く力を身に付けられるように、補充的な指導を行っていきます。
- ・では、家庭で何か対策のようなことはできないのでしょうか。高学年の児童向けには、普段、全国学力テストの問題に出てくるような**非連続型のテキストと文章との組み合わせに慣れていない**という点が挙げられると思います。学校のカラーテストではこうした問題はほとんど出てきません。**新聞にはこうした記事が様々なテーマや話題で掲載されています。論理的な文章が多く、段落ごとの構成も捉えやすく書かれています。多少難しい語句も記されていますが、かえってそれが子供を伸ばします。分かる部分をつなげていけば、大体の文意も理解できます。**

算数

- ・図形の作図の問題は、端末等でプログラミングで作図をした経験がなくても、コンパスや定規、分度器などを使って作図をした経験は誰にもあります。実は、これらの**作図セットを使って作図すること自体がプログラミングの思考**で行っていると言ってもよいです。こうした作図セットを使った作図をする場合、手順を誤ると正確な作図はできません。プログラミングも同様で、間違った指示や値を入力すると正確な作図ができないのです。**家庭でお子様が作図の学習をしているときは、正しい手順を理解できているかを気にしてあげるとよいです。**
- ・割合は、定着に手間がかかる単元です。そのため、学校での学習量だけでは十分ではないと思われます。**似た類題を何度も解く経験が必要です。**この割合の問題自体、親御さん自身も苦手という方は少なくないでしょう。中学校時代に、水溶液の濃度の問題(理科「質量パーセント濃度」の計算)が苦手ではなかったですか。**お子様と一緒に問題を解くなどして、子供自身が苦手を楽しく克服できるとよいです。**

理科

- ・小学校理科の教科書の単元構成は、一見すると「生物、地学」、「物理、化学」の分野がばらばらになって載っているように思われます。それは季節ごとに動植物の成長や生態の様子を直に観察したり、気象などの学習もその時期に適した内容になっていたりするためです。**お子様が、少しでも関心のある分野から学習をサポートしてあげてはどうでしょうか。具体的には、科学博物館植物園、プラネタリウム、地質標本館、JAXAなどに行ってみてはどうでしょう。理科の学習で子供の多くは、黒板の授業や動画の内容よりも、実際の観察や実験をよく覚えています。**こうした経験はお子様が進学するとなかなかできないものです。ぜひ試してみてくださいはいかがでしょうか。

おわりに

4年生と6年生の算数の授業に出ていて感じたことですが、同じ授業で同じ課題に取り組んでいるとは思えないほどノートの取り方がさまざまです。確かに、4校が統合したので、以前の学校の慣れがまだ多少あるのでしょう。問題は、「これは後で見返してわかるのかな？」と思うノートがあることです。右図は、本校の児童のものではありませんが、典型的なNGの例です。お子様の算数ノートはどうでしょうか。

算数ノートは、ケチってはいけません。以前担任した子供たちにも言いましたが、ぎゅうぎゅうに詰めて書くと、何がなんだかわからなくなります。一見、きれいな字で書かれたノートでも、詰めて書かれたノートは見返す気になりません。「この計算式は1問目のものか、2問目のものか?」「数字がいっぱい並んでいるけど、答えはどれか?」「線分図に書かれた数字は何を指しているのか?」などなど。ノートを詰めて書く子は算数が苦手になることが多いです。特に、間違いの多い子は、右半分を直し用に白紙で空けておいてもよいでしょう。

慣れるまでは線を引いてスペースを区切ってみたり、方眼ノートを使ってみたりしては、どうでしょう。

